



Data

監督・脚本：デスティン・ダニエル・クレットン

脚本：アンドリュー・ランサム

原作：ブライアン・ステューブソン『黒い司法 黒人死刑大国 アメリカの冤罪と闘う』

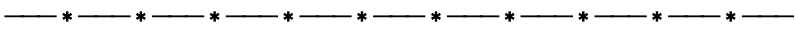
出演：マイケル・B・ジョーダン／ジェイミー・フォックス／ブリー・ラーソン／ロブ・モーガン

👁️👁️ みどころ

『アラバマ物語』(62年)は『十二人の怒れる男』(57年)と並ぶ「法廷モノ」の古典だが、アラバマの州都モンゴメリーでは、1980年代でもなお、本作のようなひどい黒人差別が。それは、EJを立ち上げたブライアン弁護士が自ら体験したことだから間違いない。

冤罪事件の調査と再審請求のための新証拠の収集は大変。本作を観ていると、自由と民主主義の国アメリカで「司法取引」はひどい運用がされているが、そんなものを日本に導入して大丈夫？それにしても、ブライアン弁護士の質量ともに優れた弁護活動には敬服！

私が阿倍野再開発訴訟で画期的な最高裁判決を獲得した1992年に、彼もアラバマ州最高裁で本作のような画期的な判決を獲得しているので、私はとりわけ彼に親しみを持ったが、日本の若手弁護士は本作のブライアン弁護士からしっかり学んでもらいたい！



■君は『アラバマ物語』を知ってる？是非併せて鑑賞を！■

私は『法廷モノ』名作映画から学ばされた法律と裁判(19年)を出版しているが、これは法学部の学生や司法修習生そして若手弁護士に「法廷モノの名作から学ばされた法律を学んで欲しい」との一念から出版したものだ。しかして、法廷モノの名作を1本だけ挙げると言われると、多くの方はシドニー・ルメット監督の『十二人の怒れる男』(57年)を挙げるだろうが、それに並ぶ法廷モノの名作が、黒人差別をテーマにした古典的名作『アラバマ物語』(62年)だ。

今ドキは、この2本すら観ていない法学徒が生息しているそうだからヤバイ。もし、あなたがそうなら、直近の法廷モノの名作となる本作はもちろん、本作と併せて、その古典的名作2本の鑑賞をお薦めしたい。

■□■私は都市問題へ！彼は冤罪救済の人権派弁護士に！■□■

日本は、中曽根民活が吹き荒れた1980年代、一方では株価が右肩上がりに上昇し、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われ、他方では地価が高騰し、都市問題が噴出した。1974年に弁護士登録した私は、一般民事、刑事事件の処理とは別に大型公害訴訟に約10年間精力を傾注した後、1984年5月から大阪駅前再開発問題研究会に参加し、以降都市問題を私のライフワークとした。

他方、1980年代にアメリカのハーバード・ロースクールを卒業した黒人弁護士ブライアン・スティープンソン（マイケル・B・ジョーダン）は、いくらでも金になる案件を扱うチャンスがあったにもかかわらず、それに背を向けてアメリカ南部のアラバマ州の州都モンゴメリーに向かった。そこには、自ら事務局長となって立ち上げた「EJI（イコール・ジャスティス・イニシアチブ）」の事務所があった。もっとも、ブライアンが到着した時、EJIの運営部長である白人女性エバ・アンスリー（ブリー・ラーソン）は、家主からいきなり契約破棄を宣告される中で猛抗議をしている真っ最中だった。家主は「日常的に死刑囚が出入りするような事務所には部屋を貸せない」と賃貸借契約を一方向的に破棄してきたわけだが、その可否は？

それはともかく、モンゴメリーを拠点としたEJIは、人種、性別、年齢、障害などを理由に不当に逮捕・収監された人々に法的支援をする非営利団体で、ブライアンが独力で設立した組織というからすごい。ジョン・グリシャムの原作を映画化した『レインメーカー』

（97年）では、ハーバード・ロースクール3年生の主人公ルーディが、一流法律事務所就職し、司法試験に受かって弁護士となり、大事件を手掛けて名を挙げレインメーカーになることを夢見ていた。しかし、残念ながら何のコネもない一介の苦学生を雇ってくれた法律事務所は、交通事故の被害者から強引に損害賠償事件の委任状を取るためルーディに病院通いを指示し、何としても依頼人を獲得しろと叱咤するような事務所、脱税、陪審員との裏取引のウワサもある悪徳弁護士事務所だった（『“法廷モノ”名作映画から学ぶ生きた法律と裁判』62頁）。彼の同期生が何人いるのかは知らないが、ハーバード・ロースクールにもこんな変わり種がいたことにビックリ！

このEJIは、大阪で言えばさしずめ「公設事務所」だが、依頼者からは1セントも受領せず、公的支援だけでホントに維持していけるの？また、近時中国の人権派弁護士はホントに大変だが、人種差別の強い1980年代のアラバマ州で、彼もEJIの人権派弁護士としてホントにやっついていけるの？

■□■死刑囚面会の姿にビックリ！80年代にこんな屈辱が？■□■

弁護士は一般人とも、また家族とも違い、依頼人の「弁護士」として、特別の面会システム（特権）を持っている。そのシステムは国によって異なるが、弁護士が第三者（とりわけ警察、検察、その他の国家権力）の関与なしに依頼人（刑事被告人、死刑囚）と2人だけで面会し、2人だけで秘密の話ができるという特権だ。1974年4月に弁護士登録した私は、一番最初に受任した国選弁護事件で何度も大阪市都島区にある大阪拘置所に通って被告人と面会し、1年半の審理を経て無罪判決を獲得した。EJIの事務局長として赴任してきたブライアン弁護士がはじめてアラバマ州刑務所へ死刑囚面会に行った時は、きっとそんな私と同じ気持ちだったはずだ。しかし、きちんとしたスーツ、ネクタイ姿で面会を申し出たブライアン弁護士に対する受付の男の仕打ちにはビックリ！

日本では弁護士バッジが特権の象徴で、拘置所ではバッジを見せればカギのかかった門を開けてくれる。また、テロへの警戒が強まってきた今日は、裁判所に入るにも一般人は手荷物検査を経なければならぬが、弁護士はバッジを見せればそれをパスすることができる。しかして、ブライアンも心勇んでアラバマ州刑務所で初の死刑囚面会を申し込んだが、受付の男からは横柄に「見慣れない顔だな」を言われたうえ、部屋に入ると「服を脱げ。下着もだ」と言われたからビックリ！一体これはナニ？資格を持つ弁護士に対してそんな対応が許されるの？私だったらその場ですぐに抗議したうえ、然るべき処置を求める手続を取るが、ブライアンがそれをしなかった（できなかった）のは、まだ新米だったため？それはわからないが、素っ裸になったブライアンに対しては、さらに「ケツを出せ！」とまで言われたから、さあ、ブライアンはどうするの？

それは、あなた自身の目でしっかり確認してもらいたいのが、1980年代のアラバマ州の州都モンゴメリーのアラバマ州刑務所でこんな現実があったことにビックリ！アメリカは法治国家ではなかったの・・・？

■□■なぜこの黒人がロンダ事件の犯人に？検察側の証人は？■□■

本作導入部では、ブライアンが『アラバマ物語』で有名なアラバマ州に車で乗り込んでくる姿と平行して、黒人ながらパルプ材業者として成功し、財も成している黒人男ウォルター・マクミリアン（ジェイミー・フォックス）が、いきなり警察に車を止められ逮捕される姿が登場する。その被疑事実は、18歳の女子大生ロンダ・モリソンがアルバイト先のクリーニング店で射殺されたという「ロンダ事件」だが、なぜこの黒人男がその被疑者に・・・？

ウォルターの裁判で「検察側の証人」として有罪の決め手になったのが、別の殺人事件で逮捕され刑の軽減と引き換えにウォルターが犯人だと証言（偽証？）したラルフ・マイヤーズ（ティム・ブレイク・ネルソン）。また、それを補強したのが、拘置所に勾留中、釈

放条件としてマイヤーズの証言を裏付ける証言（偽証？）をした、もう1人の「検察側の証人」フックスだ。この2人の証言によって、ウォルターは有罪に。しかも、第1審裁判所での陪審の判決は終身刑だったが、キー判事がそれを覆して死刑にしたそう。そして、今ウォルターは死刑囚の1人としてアラバマ州刑務所に収監されていたからひどいものだ。

ブライアンがEJIの事務局長（といっても、目下自分一人だけ）として最初に面会を求め、死刑囚の支援をしようとしたのはこのウォルターだが、これまでの弁護士の支援に絶望し切っているウォルターは、当たり前前の道筋ばかりを並べ立てる新米弁護士ブライアンを見ても全然喜ばなかったのは仕方ない。もっとも、死刑囚のお隣さん（？）である、①恋人の気を引くために仕掛けた小型爆弾で、無関係な少女が死亡したことで、殺意の否定や精神疾患は考慮されずに死刑判決を受けている、ベトナム帰還兵でPTSDを患っている男ハーバート・リチャードソン（ロブ・モーガン）、②1985年、バーミングハムのファーストフード店で2人が射殺された強盗殺人事件で不当に逮捕され、死刑判決を受けている男アンソニー・レイ・ヒントン（オシエア・ジャクソン・Jr）等から新米弁護士の印象を聞かれると、まんざらでもなさそうな答えをしていたが・・・。

■資料の精査後は新証拠の収集へ！さあ何が集まるの？■

『リンカーン弁護士』（11年）では、マシュー・マコノヒー演じるリンカーン弁護士とミック・ハラー弁護士が、移動事務所として使っているリンカーン・コンチネンタルに乗ってあちこちに出没し、弁護活動を展開していた（『シネマ29』178頁）。それとは違い、ブライアン弁護士には、まず各死刑囚について膨大な資料（記録）を精査し、問題点の有無を突きつめていく作業が必要だった。そして、その問題点が発見できれば、次にそれを解明すべく新証拠の収集が必要だが、ハッキリ言ってそれは気の遠くなるような作業だ。しかし、ロンダ事件で死刑判決を受け、今やその執行の日を待つばかりになっているウォルターを救済するためには、とにかく動くしかない。そこで、ブライアン弁護士が目をつけたのが、ウォルターの息子の友人で、自動車整備工場でのフックスの同僚、そして後にフックスの嘘について宣誓供述をした男ダーネルだ。このように、新米弁護士のブライアンが一生懸命に動き回っている姿を見ていると、何ともしがすがしくて気持ちが良い。そして、きっとダーネルもそんなブライアンの善良さ、ひたむきさを感じ取ったのだろう。ブライアンからの良心に訴えかける働きによって、ダーネルもあの時の行動を反省し、「フックスが嘘をついている」と宣誓供述してくれたから、こりゃ有力な新証拠だ。これなら再審請求できるのでは！ブライアンがウォルターに面会してそれを伝えると、やっとウォルターもブライアンの努力を認め前向きの希望を持つようになったから、万々歳だ。

一方、モンロー郡の地方検事トミー（レイフ・スポール）は、元国選弁護人をしていた男で、ロンダ事件を担当したピアソン地方検事の後任だったが、今はウォルターの有罪判決を維持することが自分の職分だと認識していた。そのため、ブライアン弁護士からロン

ダ事件について再審請求されると面倒の上ない。そう割り切っていたから、ブライアンにとってトミー地方検事はかなり手強い相手だった。しかし、ブライアンがダーネルに働きかけ、ダーネルがフックスの嘘について宣誓供述したことを知ると、彼はダーネルに対して、「そんなことをすると偽証罪で逮捕するぞ」と脅かしたから、それに替えたダーネルは、結局証人を降りてしまった。さらに、自由と民主主義のアメリカでは基本的に「何でもあり！」だから、ある日、死刑囚救済のための活動を強めている EJI の事務所に爆弾予告の電話が入ってくることに……。ことほど左様に、冤罪事件の救済活動は大変だし、新証拠の収集はさらに大変だ。さあ、新米弁護士特有の粘りでいったんは事態を切り開くかに見えたが、結果的には逆に一層事態を悪化させてしまった新米弁護士ブライアンは、その後どう動くの？

■更なる新証拠を！法廷では弁護側の証人も！これなら！■

去る2月23日にNHK BS1で放送された『全貌 二・二六事件 完全版 ～最高機密文書で迫る～』では、何と日本の海軍が1931年2月26日に起きた「二・二六事件」について克明な調査をし、分刻みの記録を残していたことが検証されていた。それと同じように、死刑判決が確定した事件についても、公の記録だけではなく、未提出の資料等を辿っていけば、あっと驚く新証拠を発見できるかもしれない。そう考えた(?)ブライアン弁護士が再度ロンダ事件の資料を調べてみると、未提出のカセットテープを発見。ブライアンがそれを聞くと、そこではマイヤーズ自身の声で、ロンダ事件の直後、ウォルターをその犯人として目撃していないことをハッキリ証言していたからビックリ！つまり、マイヤーズは自分の刑を軽減してもらうことと引き換えに、ウォルターをロンダ殺しの犯人として目撃したと、嘘の証言をするよう迫られ、「司法取引」の結果、「検察側の証人」として嘘の証言をしたわけだ。

ブライアン弁護士の迫及によって、マイヤーズは渋々それを認めたから、ブライアンはついにボードウィン郡裁判所への再審請求審問を決意。そして今日は、そのマイヤーズが証言台に立って、「あの時、嘘の証言をした」と証言する日だ。果たして、マイヤーズはホントにそんな証言をしてくれるの？固唾を呑んで、その法廷を見ていると、マイヤーズは当初言いよんでいたもののハッキリそう証言したから万々歳。さらに、最初に現場に駆けつけたイクナー巡査も、検察側から偽証を求められたことを証言したから、これだけ新証拠が出そろえば、再審請求審問は勝利間違いなし。ウォルターや、傍聴席に座って審理の推移を固唾を呑んで見守っていた妻のミニーや子供たちはそう確信したし、また、ブライアンも、まだまだ油断はできないと言いつつ、勝利を確信していた。

ところが、なんと再審請求は棄却されたからビックリ！その理由は、マイヤーズの証言は前回か今回かのどちらかがホントでどちらかが偽証だと考えられるところ、裁判官の判断は、前回はホントで今回は偽証だというものだったからアレレ？こんな判断が下れば、

ひょっとしてトミー地方検事は、早くケリをつけるため、ウォルターの死刑執行をすぐにも決行してしまうのでは・・・？

■□■更なる証拠は？郡から州最高裁へ！世論の支持は？■□■

ボードウィン郡裁判所が再審請求審問を棄却したことによって、ウォルターの気持ち折れかかったが、若いブライアン弁護士は、まだまだ意気盛ん。「ボードウィン郡裁判所がダメなら、まだまだ州最高裁があるさ」とばかりに、今度は州最高裁に再審請求を。もちろん、それには更なる新証拠が必要だが、そのネタは？さらに、法廷活動だけではなく、世論を味方につける幅広い活動が必要だと悟ったブライアン弁護士は、CBSの報道番組『60ミニッツ』に出演して再審請求の正当性を広くアピール。ブライアン弁護士のそんな少し成長した姿は、あなた自身の目で確認してもらいたいが、そんな努力の結果、ついに州最高裁は再審を認める裁定を！ついにやったぞ！ところが、その直後、トミー地方検事は再捜査を理由に再審延期を申し立てたから、さあ、これからどうなるの？

■□■起訴の取り下げ請求は？釈放は？■□■

州最高裁が裁定を下したのは、1992年8月。ちなみに、阿倍野再開発訴訟で私たちが最高裁で勝訴判決の言い渡しを受けたのは、1992年11月26日だ。すると、全くの偶然ながら、私の都市問題での活動の高揚期と、ブライアン弁護士がEJIの事務局長として始めた、死刑囚救済活動の高揚期が時期的に重なり合うことになる。トミー地方検事は、再捜査を理由に再審延期を申し立てたが、ブライアン弁護士はボードウィン郡裁判所にウォルターに対する「起訴の取り下げ請求」を申し立て、その審理が1993年3月2日に行われた。当然、ブライアンはトミー地方検事の様々な反撃を予想していたが、そこでの彼の対応はあっと驚く意外なものだったから、それはあなた自身の目でしっかりと！

ブライアン弁護士がウォルターの記録精査活動を始めるとともに、はじめてウォルターの家族が住んでいる家を訪問したのは1989年。この時のウォルターの妻、ミニーの言葉によれば、家まで来てくれた弁護士はそれまで誰もおらず、金の切れ目が縁の切れ目になったようだ。それに比べると、ブライアンの弁護人としての活動は質量ともにすごい。しかも、それをすべて無料でやってきたのだから、それもすごい。しかし、1993年3月、ウォルターはやっと6年間収容されていた死刑囚監房から釈放され、家族のもとに帰ってくることに。この間、ブライアンの力及ばず、ウォルターの隣の房に収監されていたハーバート・リチャードソンは電気椅子による死刑の執行がされてしまったが、ブライアンはそれにしっかり立ち会って見聞したから、そのこともウォルターの弁護人として頑張るエネルギーになったはずだ。

新米弁護士として出発したブライアン弁護士が、6年後にここまで成長している姿に感

心するとともに、弁護士の成長は事件の中にあること、そしてまた、事件の依頼者との関係にあることを、改めて痛感。

■□■EJIの今は？ブライアン弁護士の今は？■□■

本作の邦題は『黒い司法 0%からの奇跡』といかにも説明調だが、原題は『JUST MERCY』。「JUST」は正義、「MERCY」は慈悲だから、直訳すれば「正義と慈悲」だ。また、原作は、ブライアン弁護士自身の著書『黒い司法 黒人死刑大国アメリカの冤罪と闘う』で、その原題は『Just Mercy: A Story of Justice and Redemption』。

ブライアン弁護士は1989年にアラバマ州で運営部長の女性エバ・アンスリーとともにEJIを設立し、自らは事務局長として本作のような獅子奮迅の活躍を続けてきた。パンフレットには宮崎真紀氏（翻訳家）の「ブライアン・スティーブンソンの功績」があり、そこでは詳しくブライアン弁護士とEJIの今が解説されているので、その素晴らしい活動に拍手を送りたい。

しかして、彼はその著書の中で「貧困」の反対語は裕福ではなく“正義”だと語っているそうだが、そのココロは？それを本作を鑑賞しながら、しっかり考えたい。

2020（令和2）年3月12日記